

英文学は「妊娠」をどのように描いてきたか

——「テーマ別」英文学史の試み——

杉村使乃

何をもって「文学史」とするのか。学会や学術雑誌で「英文学の教え方」についての様々な議論が試みられている中⁽¹⁾、英文学を扱う学科の多くが必修科目とする英文学史についても、その「あり方」について検討されるべきであろう。また従来の英文科が解体され、「文化」や「コミュニケーション」研究へとシフトしていく中で、それまでの「英文学研究」の遺産をどのように活かしていくべきかを考えることは必須であると考えられる。

一つ一つの作品は、その背景にある社会的、個人的環境と密接につながっている。だから作品が生まれた当時の社会、文化との因果関係を考えることは文学史の役割の一つである。そして、文学史は「通事的」に考えられると同時に、後の作品への影響力を考察すると、「共時的」にも考えられる（富山 82）。つまり、ある作品と後の作品との因果関係、「インターテクスチュアル」な関係について、またジャンルの形成などについても文学史の中で考えることが可能である。

文学はどれもある程度、「インターテクスチュアル」な面があると思われるが、過去の作品や文学の伝統との影響関係について意識的に描いているものがある。Virginia Woolfの*Orlando* (1928) や⁽²⁾、John Fowlesの*The French Lieutenant's Woman*(1969)は、作品と作品との影響関係だけではなく、文学の伝統の中での自分の位置づけについて問いを投げかけているような作品である⁽³⁾。そして、ここで取り上げるMargaret Drabbleの*The Millstone* (1965 以下『碾臼』)も、このような「自意識的」な作品の一つと考えられる。*The Great Tradition*(1948)を著したF.R. Leavisの下、1950年代のCambridgeにて英文学、特に19世紀の小説についてドラブルは学んだ。「消えつつある伝統であっても、自分が尊敬する伝統の最後に連なりたい」と明言する彼女は(Bergonzi 65)、作家であると同時に英国小説、そして女性作家の伝統にも意識的な英文学者でもある⁽⁴⁾。

しかしながら、ここでは女性作家の伝統の中におけるドラブルの位置づけではなく、『碾臼』において「妊娠・出産」というテーマをドラブルがどのように描いているのかについて考察し、その意義について考える。まず初め

にドラブルがこの作品を描いた60年代の文化について概観し、作品との関連について考える。この作品では他の文学作品に関する言及が多く見られるが、それらを手がかりに英文学は「妊娠・出産」というテーマをどのように描いてきたかについて考察する。ドラブルの後も「妊娠・出産」というテーマは多く書かれているが、「愛・結婚・生殖」は三位一体であるという「幻想」の崩壊後は、この「幻想」を礼賛するのではなく、この「幻想」への問いかけという形で多くの作品が描かれている。『碾臼』で描かれた「妊娠・出産」、そしてシングルマザーの問題は興味深いものであるが、それらが現在どのように展開しているのか、90年代の作品のいくつかに言及する。

1. Rosamundの60年代

第二次世界大戦後、「揺りかごから墓場まで」というモットーからうかがえるように、英国政府は福祉を政策の目玉として押し出した。失業率も下がり、1959年の選挙では保守党が大勝利を収めた。「豊かな」世の中が到来したにも関わらず、労働者階級と中流階級の溝は逆に広がっていた（窪田 2）。ファウルズの*The Collector*(1963)は、そうした階級間の溝についての深い考察が伺われる作品である。F. Cleggは、職場の向かいに住む美しいMirandaに強い好意を持ち、偶然手に入れた大金を元に周到に準備し、彼女を拉致、監禁する。全寮制の学校に通い、若々しく、ボーイフレンドと車ででかけるミランダを、彼女に決して気づかれることなく見つめるクレッグ。彼が一介の職員として働く市役所の分館と、ミランダの家は通りを隔てた向かい合わせだが、彼らを隔てるものはその通りの幅以上のものである。彼女と共有することのできる「文化」を享受できず、彼女を三人称でしか呼ぶことのできないクレッグは、拉致する以外に彼女と友人になる手段はないと信じ、田舎に自分が借りた屋敷の地下に、階級を規定する社会から隔絶され、二人が愛を育める陸の孤島を築こうと試みる⁽⁵⁾。ここではクレッグとミランダが、「男」と「女」として描かれるため、異性間の欲望の交錯という面が強調されているかもしれないが、二人の間の溝は性差だけで説明のつくものではない⁽⁶⁾。第二次世界大戦後のイギリスには、Kingsly Amis(1922-)、John Osborne(1929-94)、John Wain(1925-94)、そしてAllan Sillitoe(1928-)たち、いわゆる「怒れる若者たち」(Angry Young Men)と呼ばれる作家たちが登場した。彼らの多くは労働者階級の出身であり、作品の中でエスタブリッシュメントを戯画化し、否定しようと試みた(Michael Alexander 369)。そこには、「揺りかごから墓場まで」人生を保障してくれる一方、同時に一生を決まった枠内で生活することを宣告する社会への苛立ちが見られる。

作者自身が中産階級知識人の家庭に生まれたことを反映してか、『礪臼』の主人公Rosamund Staceyも大学の教員を父に持ち、エリザベス朝の詩人を研究する中産階級知識人である。思いがけない妊娠の後、半ば成り行きで出産を決意するが、シングルマザーという彼女の自立した生活を支えるのは、彼女自身の階級と、それまで受けてきた教育に負うところが多い。そしてロザモンドは、社会主義者としての理想を持ちながらも、同時に自分が階級社会の中で優遇されていることにも気づいている。この作品はロンドンの地名への言及が多く、それは階級の配置を示してくれる。ロザモンドはMarylebone High Streetの現代的なフラットに住み、Upper Regent StreetやBritish Museum周辺を主な活動場所としている。彼女は自分の住所に誇りに思っており、陣痛が始まった時も、救助員が敬意を払うであろうその住所から救急車に乗れることを幸せに感じている(107)。ところが妊娠を機会に今まで踏み入らなかつた場所へ向かうことを余儀なくされる。そのときロンドンの町は“a fearful moral significance”(38)を帯び、彼女はそれを“a map of my weaknesses and my strengths”と呼ぶ(38)。作品中にJohn Bunyanへの言及があることから、妊娠以降の彼女の「冒険」は彼女を精神的な成長に導く“pilgrimage”と考えられる。彼女は、それまで「他者」としか認識していなかつた人々と出会い、自分が育てられてきた「社会主義」的な環境、そして自分の中にある「社会主義」的な理想とは何であったのかを見直すことを余儀なくされる。次々と妊娠し、子供たちを持て余す母親、貧しく、疲弊した人々、そしてパキスタン、西インド諸島あるいはギリシャ出身の外国人、これらの人々との出会いはロザモンドにとって“a revelation”であり(41-43)、「妊娠・出産」という共通の経験を通して、他の女たちと自分との間の違いや、他者との関わり合いの大切さに気づくようになる。

また1960年代の文化について特筆すべきことは、フェミニズム運動についてである。この社会の動きと英文学における「妊娠・出産」の表象の変遷は大きく関連している。この時期のフェミニズムを象徴する著作としてBettie Friedanの*Feminine Mystique* (1963)が挙げられるだろう。アメリカの中産階級の女性たちは第二次世界大戦後、教育的にも医学的にも「家庭」の中におけるべき存在であると強調され、そうした女性の中に精神的鬱屈感が広がっていた。イギリスではJuliet Mitchellにより、女性の経験や立場を公の言語で記そうという試みが見られた。それまでの参政権を始めとする女性の権利拡張を主張した運動とは別に、人の意識や無意識の改革が叫ばれたこの「第二波フェミニズム」は“consciousness movement”とも呼ばれている(窪田 65)。この社会の動きと連動して、1960年代の女性作家にとって「女」という枠組

みをどうとらえるのかを考えることは大きな課題であった（窪田 5）。ドラブルが初めての作品、*A Summerbird Cage*を出版したのは1963年で、そこには結婚によって自己実現するという幻想を信じないSarahという女性が現れる。『礪白』では、Oxfordで経済学を学び、平和主義運動を展開していたロザモンドの姉、Beatriceの結婚生活と妹のシングルマザーとしての生活が対比されるが⁽⁷⁾、結婚という枠組み（鳥かご）に対する内と外から見方の対比はドラブルの最初の作品でもすでに扱われている。大学で学位を取りながらも、夫の職業のため、北部に住居を構え、三人の子育てに忙しい毎日を過ごす。夫、Hallamは原子力研究所に勤め、ベアトリスは、夫が勤める研究所に出入りしている技師の子供が自分の子供と遊ぶのを好まない。せっかく取った学位を十分に活かしていない、また大学時に持っていた「理想」をいとも簡単に放棄してしまったかのように見える姉に対して、ロザモンドは批判的な目を向ける。しかしながらこの姉の姿は確かにこの時代の女性の「現実」を表してもいたのである。

2. 文学は妊娠をどう描いてきたか

英文学が描いてきた「望まない妊娠」をしてしまった不幸なヒロインたちと比べると、ロザモンドの妊娠はポジティブに捉えられる点がいくつかある。19世紀小説を学んだドラブルは、小説の「偉大な伝統」の中で女性がどのように描かれているかに注目し、作品の中で新しいヒロイン像を模索している⁽⁸⁾。女性の愛と性のあり方に関連して、作品の中では、John Bunyan、Nathaniel Hawthorne、Thomas Hardy、そしてBernard Shawらの作家と作品についてトラブルは言及している。ロザモンドは、一度きりの肉体関係で妊娠してしまったという事実を伝統的に結婚外の恋愛や情欲を戒めてきた“the best moral fable for young women” (20)に喩える。しかし最初のボーイフレンドのHamishを始め、深い関係を避けていた禁欲的な自分の態度にこそ罰が下されたのだとロザモンドは感じるのであった。

Oddly enough, I never thought it was a judgment upon me for that one evening with George, but rather for all those other evenings of abstinence with Hamish and his successors. I was guilty of a crime, all right, but it was brand-new, twentieth-century crime, not the good old traditional one of lust and greed. (21)

そして自分の胸に刻まれるであろう“A”という文字は“Adultery”では

なく⁽⁹⁾、大いに恋愛遊戯を楽しむ一方で、深い人間関係に陥ることを恐れる彼女の“Abstinence”のせいであるとして、ヴィクトリア朝的な「墮落した女」(Fallen Woman)になることを恐れているわけではない。この頃、ロザモンドはJoeとRogerという二人の違うタイプのボーイフレンドと同時につきあうという“excellent system”により、肉体関係ぬきの気軽な恋愛を楽しみ、外面的にはむしろ「悪女」を演じることに満足している(22)。結婚という枠組み以外の恋愛で身を持ち崩す女は、19世紀の“narrative painting”や小説の格好のテーマであった(松村 87-94)。Hester Prynne、Hetty Sorrel、Ruth Hilton、そしてTess Durbyfieldは、「墮落した女」たちがどのように描かれてきたかを考えるための例として挙げられるだろう⁽¹⁰⁾。彼女たちはいずれも自分よりも社会的な地位が上の男たちとの結婚外の関係により、子供を出産し、共同体からの追放を宣告される。Elizabeth Gaskellは、小説のヒロイン、ルースと「不義」の子供に病気による死という運命をたどらせる。そしてギaskellその人も、聖職者の妻でありながら社会規範を破った女性を描いたことによって非難された。こうした社会批判を程度の差はあれども、ドラブルも経験している。『碾臼』がラジオで放送された1965年、「非嫡出子」や「妊娠中絶」、そして出産の様子を描いた点は大きな波紋を呼び、ドラブル自身が放送内でこれらが「小説」に「適切な」題材であるということを弁明するという出来事があった(Suga 12)。妊娠、出産という女の経験を描写することは未だにタブー視されることだったのである。しかしながら19世紀のシングルマザーの“illegitimate baby”は、「死」という形で共同体から追放されるが、1960年代のヒロインの“illegitimate baby”は、“status symbol”として女友達のLydiaから評価される(84)。つまりドラブルの作品では私生児を産むことがある種の「雄々しい」行動として表されている。

しかしながら、実際の妊娠・出産は「雄々しい」ことばかりではない。作者自身の妊娠と出産の経験も反映して、婦人科、産院の場面がこの作品では多く現れる。インターンたちに代わる代わる診察される心境を以下のように描いている。医師の指示にしたがって、インターンたちはロザモンドの体を診察する。

...I was not prepared for being examined by five medical students, one after the other. I lay there, my eyes shut, and quietly smiling to conceal my outrage,... I lay there and listened to them and felt them, with no more protest than if I had been a corpse examined by budding pathologists for the cause of death. But I was not dead, I was alive twice over. (67)

ここでは医師と患者の関係についての一つの考察が見られる。つまり医療現場において患者の「肉体」ではなく、「感情」というものへの配慮はどうなっているのかという問題である。この問題は後にロザモンドの子供 Octavia が手術を受ける際にも現れる (143-150)。60年代は女性作家が女性の肉体的な経験を作品の中で語ることを可能にした。ドラブルは女性の経験の描写と女性作家の伝統について語った際、「Sylvia Plath の女性の子育ての経験を歌った ‘Morning Song’ は60年代前には書かれなかった」と指摘している (Suga 12)。つまり60年代からのフェミニズムの動きは、女性が自分の経験、特に自分の肉体と性について語ることを可能にしたのである。

しかしながら一方で、そうして描かれた女性の経験の描写が読者、特に男性の共感を得ることができたのかという疑問は残る。『碾臼』でも生まれた子供のことを誇らしげに語るロザモンドに対して、友人のジョーはそれらを “one of the most boring commonplaces of the female experience... nothing to be proud of, it isn't even worth thinking about” (115) であると批判する。これはロザモンド自身も、作家である彼が作品の中で描く男性のめくるめく性体験に興味を持ちつつも、深い共感を示せないことと同様である (115)。

女性が自分たちの経験について率直に記し始めたことは60年代からのフェミニズムの特徴であるが、それらが必ずしも女性たちに「希望」をもたらしたわけではない。閉塞した家庭生活、解消できない不満、精神的な疲労感、そして自殺。これらは、フリーダンが著書に “the problem that has no name” (15) と記したことと大きな共通点を持つであろう。シルヴィア・プラスの自殺にも象徴されるように、新しい「女の物語」は、女の人生について率直に語り始めたが、ポジティブな女性像を読者に提示できなかったという批判もある。「女の物語」は単に “confessional gynecological literature” あるいは “miserable” でしかないのかという問いかけがなされたのである⁽¹¹⁾。

またドラブルは『碾臼』の中で、「妊娠・出産」という経験をどのような「言葉」で描くべきか模索している。その模索をロザモンドの思考を通して我々は知ることができる。「妊娠」に最初に気づいた時、最初に彼女の頭の中は “blankness” (39) であった、それから、墮胎の試み、精神的な不安、病院での検診などから “Gin, psychiatrists, hospitals, accidents, village maidens drowned in duck ponds, tears, pain, humiliations” といった、およそ “baby” とは似ても似つかないイメージが浮かぶ。一方、病院で出会う、疲れきった「母親」たちの姿を見て、男性詩人が描く “ships in full sail” といった堂々とした美しさとはかけ離れていることにロザモンドは気づく。妊娠、出産とい

う経験を経て変化する女性の姿をどのようにすればポジティブに描けるのかという問題はドラブルにとって一つの課題であったろう⁽¹²⁾。ロザモンドは病院の待合室でエリザベス朝詩人についての研究書を読み(77)、友人に出産を祝福されるシングルマザーであり、その肉体は退院時には元に戻り、医師たちを驚愕させる(122)。男性医師たちの固定概念を覆すような、あるいは彼らが女性の肉体に対して施す定義に逆らうような女性の経験を描くことをドラブルは試みている。

他者と深く関わることに恐れを抱いていたロザモンドは妊娠と出産により、今まで足を踏み入れなかった社会を垣間見、人間と人間とのつながりを感じるようになる。一方、妊娠と出産は安定した生活と仕事を持つ彼女のハンディとなるが、それだからこそ他者からの助けを求められる存在になるのである。ドラブルの母がそうであったように(Takano 64)、60年代の中産階級の女性は例外的な職業を除いては結婚後、家庭に入ることが多かった。女性が「妊娠・出産」を機に家庭に入るという行動は、医学によって正当化されてきた。歴史を振りかえると「母性」はジャン・ジャック・ルソーにより理論化され、その論は医学によって正当化されていった(Knibiehler 160-192)。19世紀の「医学辞典」には「女性は、男性の存在の一部にすぎない。女性は、自身のためではなく、男性と協力して種の反映をはかるために生きている。これこそ、自然と社会と道徳が認める唯一の目的である」と公に記されていたのである(Knibiehler 201)。こうした論は「妊娠・出産」は女性の人生において重要なものであり、「母性」は本能的なものであるという神話を構築していった。ロザモンドの友人、ジョーも彼女の出産の決意について「どんな女性でも“a sense of purpose”を得るために出産を望むのだ」と述べる(47)。確かにロザモンドは自分の肉体が持つ“fertility”に誇りを感じているが(48)、ロザモンドの「妊娠・出産」は男性が築いた財産の担い手を生産するというよりは、女性と女性とのつながり、他者とのつながりの到来を感じさせるものであった。そしてドラブルはロザモンドを通して、「妊娠・出産」を経て疲弊する女性像とは違う、美しく、子供を持ちながら自活するポジティブな女性像を提案している。ロザモンドは出産後、ベッドにつけられた“U”の文字が“Unmarried”を表すことに気づき驚愕する(117)。この文字は現代における「緋文字」であるかもしれないが、ロザモンドは女にラベリングする社会を冷静に見つめ、そのラベルを超越する女性像を表象している。

3. 「一人じゃない私」の物語

現在、英文学は「妊娠・出産」をどのように描いているのであろうか。ここではシングルマザーの問題、女性の自立といった言葉を手がかりに1990年代のいくつかの作品について比較検討してみたいと思う。今日、英文科に所属する学生にとって、英文学へのアクセスは書籍だけではなく、映像によるところも多い。以下に言及する作品はすべて映画化されたもので、現在ビデオ、DVDで入手可能な作品である。同時代の作品がどのような「伝統」を背後に持っているのかを考えることは、「文学史」とそれを学ぶ者を結びつけるポイントになると考える。ここでは「妊娠・出産」というテーマが現在どのように描かれているのか⁽¹³⁾、またそこから拡大して「家族」という問題がどのように展開しているのかを概観する。

『碾臼』の「妊娠・出産」というテーマの意義は、単に女性の経験が率直に描写されたというだけではなく、この経験を通して階級と教育の恩恵を受け、豊かで自立した生活を送っていたロザモンドがある種の「弱者」としての経験をすることにもある。妊娠によって自分の“independence”が脅かされると感じていた彼女が(45)、自分の「自立」を支えていた物は何であるかを考察し、他人に頼ることの必要性を感じるようになる。そしてその結果、今まで避け続けていた“the bond that links man to man”を感じられる存在になるのである(77)。今まで親子、夫婦という関係を「金と責任」だけの関係であると軽蔑してきたが、その埋め合わせに自分が提示してきたものが実はしゃれたフラットや人目を引くような美貌という即物的な物に過ぎなかったと気づく(77)。

ロザモンドがここで認識した人間関係のあり方は現在我々が住む社会にも通じるものがある。つまり物質的な豊かさと人間関係の希薄さの対比である。妊娠と出産により、一人きりの生活を守っていたロザモンドも自活するための糧を得るために誰かしらの助けを必要とする。友人のリディアとの「同居」を受け入れ、この二人の同居はリディアがかつてのロザモンドのボーイフレンド、ジョーと付き合い始め、そして彼と別れた後も続く。この女同士のつながりは一時的な男女のつながりよりも、長きに渡ることになるのだ。「夫婦」、「親子」という枠組みを超えた人間関係の構築について、次に90年代の作品と比較検討してみる。

ロザモンドの妊娠と出産の形に新しさをもたらしたのは、実の父親であるGeorge Matthewのキャラクターにもあるだろう。いかつい顔であるが、魅力的で、精力的に執筆活動をするジョーと、生まれも育ちもよく、法の世界で活躍するロジャー。この二人がある種の「男らしさ」を呈示していることに比べ、“queer”(33)であるジョージは“unnoticeable”、“unaggressive”、

“unassertive”、“unobtrusive”、“gentle”、“effeminate” (25)、“camp” (26)、“mild”、“frail”、そして“non-masculine” (183)と形容される。ロザモンドは父親が彼であることを告げないばかりか、二人で過ごした夜の後には敢えて彼に会わないように努める。時折、気弱になったときはBBCでアナウンサーをするジョージの声をラジオで聞いてみる (89)。元より「女性らしい」と形容される彼の身体性はラジオという機械を通してロザモンドに届けられる。彼女の性行為への不安感、その行為そのものが人間関係への深い“commitment”を彼女に示すものであるからである。もう一つには性行為を通して、自分が男性という他者にコントロールされることを恐れているためとも考えられる。だから「女性的」なジョージとだけそのような行為に至れたという点は興味深い。

Helen Fielding(1958-)の*Bridget Jones's Diary*(1996)は、女性の自立、結婚観、女同士のつながりという『礪白』に共通したテーマを持っている。この作品はIndependent紙の日曜版に1995年の1月から連載され、人気を博し、映画化され、「私はブリジットだ」と告白する女性たちが多く現れた。ブリジットは、同じくワーキングウーマンであるSharon、Judeと“summit”と称するパーティを開き、恋や仕事について語り合う。MagdaとJeremyというブリジットが敬愛するカップルも、実は子育てに追われ、夫の浮気という悩みを抱えている。作家が執筆中、BBCで放映されていたJane Austenの*Pride and Prejudice*が作品中にも時折表れ (246)、読者はオースティンが描いた「愛」や「結婚」が90年代においてどのように変化したのか、あるいは変化していないかのかについて考えさせられる。ブリジットの友人Tomはゲイで、独身の女とゲイの関係について以下のような考え方を持っている。

Tom has a theory that homosexuals and single women in their thirties have natural bonding: both being accustomed to disappointing their parents and being treated as freaks by society.(27)

この「男らしくない」男性と女性との関係は、『礪白』のロザモンドとジョージの関係を読み解くヒントになるであろう。

ロザモンドは自活できる力を持ったワーキング・マザーであるが、「望まない／望まれない妊娠」やシングルマザーの問題は十代の女性においてはかなり深刻である。Billie Lettsの*Where the Heart Is*(1995)は、10代の妊娠、女性たちの間の共感、生まれてきた子供に関する問題を取り上げている作品である。17歳で妊娠7ヶ月のNovalee Nationは新しい生活を求め、ボーイフレンドと

共にカリフォルニアへ向かう。大きなおなかを抱えたノヴァリーは彼の手を自分の腹部に当て、以下のように尋ねてみる。

“Can't you feel that tiny little bomp... bomp... bomp?”

“I don't feel nothin'.” (11)

「妊娠・出産」という女性の経験について、あるいは女性と男性がお互いの肉体的な経験についてどのくらい共感できるのかという問題は先に取り上げた。結局、この若い父親はノヴァリーをWal-Martの駐車場に置き去りにし、去っていく。巨大なスーパーマーケットの片隅でノヴァリーは暮らし始め、やがてAmericusという女の子が生まれる。彼女が出会う人々、特にシングルマザーのLexie との子育てにおける協力関係はユニークである。「アメリカス」という生まれた子供の象徴的な名前からもうかがえるように、彼女の出生と彼女を取り巻く人々や事件はアメリカの「家族」が抱える問題点を呈示している。

子育てと自立に奮闘するシングルマザーの姿は、女性たちの共感を呼ぶであろうが、生まれてきた幼い子供たちはどのような立場におかれているのであろうか。『碾臼』のロザモンドは娘のオクティヴィアが手術を受けたことをきっかけに、「子供」という幼い存在について考察する。

Lord knows what incommunicable small terrors infants go through, unknown to all, We disregard them, we say they forget, because they have not the words to make us remember, because they cannot torment our consciences with a recital of their woes.(143)

そしてやがてロザモンドの中には自分の子供以外の子供たちへも「共感」が沸くようになるのである (152)。

レッツの作品では幼い子供たちにおける問題が最も恐ろしい形で表れている。ノヴァリーと同様にシングルマザーであるレキシシーの幼い娘たちが、彼女の恋人Rogerによって性的虐待を受けるというショッキングな事件が起こる。家庭内における幼児・児童虐待や性的虐待が必ずしも血縁関係外で起きるわけではない。しかしレキシシーは、自分のシングルマザーとしての立場が大きく関係しているのだと感じているようである。

シングルペアレントの恋愛、あるいはシングルマザーは恋の対象としてどのように描かれているのだろうか。Nick Hornbyの*About a Boy*(1998)の主人

公Will Freemanは、シングルペアレントの自助グループ、SPAT(Single Parents—Alone Together)(32)に自分は離婚した夫で2歳の息子がいると偽って入会する。彼の本当の目当てはかつて男との関係に失望した経験があり、“Mr Right”を探しているシングルマザーたちであった。“spat”という名称も皮肉に響く。自分の子供と恋人とどのように関係を築きあげていくべきなのか。これは*Where the Heart Is*でも問いかけられる問題である。*About a Boy*で、ウィルはSPATを通じて知り合ったMercusという少年との間に擬似家族的な関係を築くが、マーカスの母親Fionaとの間に恋愛感情があるわけではない。「妊娠」というプロセスはないものの、思いがけなく「子供」を持ってしまった男の物語をホーンビーは描いている。結婚もせずに「父親」のような役割を果たすことになるウィルは、子供を育てるという行為に男たちがどのように関わっていけるかについてある可能性を示している。もちろんそこで示される「父親像」は家父長的な存在ではない。

ウィルは、ヒット曲を飛ばした亡き父の印税で豊かなシングルライフを送っていた。

Will wondered sometimes... how people like him would have survived sixty years ago.... Sixty years ago, all the things Will relied on to get him through the day simply didn't exist: there was no daytime TV, there were no videos, there were no glossy magazines and therefore no questionnaires and, though there were probably record shops, the kind of music he listened to hadn't even been invented yet.(6)

物質的な豊かさによって、彼は自分が「自立」した存在であると錯覚している。John Donneの“No man is island”は映画化された*About a Boy*で効果的に使われている。物質的な豊かさにもまれ、一人の生活に満足しているウィルは、自分の生活を“a little island paradise”に喩える(Screenplay 8)。この詩は映画版では最後まで「個人」と「家族」という問題を問いかける役割を果たす。“No man is island”,しかし、一つ一つの「島」をつなぐものは必ずしも結婚や血縁ではない。

ブリジット・ジョーンズは、恋に落ちてはいけない相手として、“commitmentphobics”をあげている(2)。ブリジットの友人、ジュードも“self-indulgent commitment phobic”と呼ばれる恋人Vile Richardに振り回され(19)、人一倍、結婚願望が強く見えるが実は彼女自身も“commitment problem”があるのだと告白する(188)。自活できるキャリアを持ち、“upper

middle class”の暮らしを満喫するブリジット（宮崎 195）たちが“commitment”に対しどういう態度をとるのか、他者とのかかわりを極端に恐れていたロザモンドや「人は『島』だ」と断言したウィルが直面した問題がここでも問われている。

「妊娠・出産」というテーマが英文学ではどのように描かれてきたかを、ドラブルの『礪臼』を中心に考えた。このテーマは「家族」という問題と深く関わり、現在に至るまで作家たちが新たなる「女性像」、あるいは「人間像」、「家族像」というものを模索している。

英文学史を学ぶにあたり、単に年代順に、「聖典」を紹介する「文学史」で現代の学生たちの興味を引きつけることは難しいであろう。ここで取り上げた作品はごく僅かではあるが、「テーマ別」という視点の下ではもはやイギリス、アメリカと分類する必要性は必ずしも必要ではない。また「英語」という言語で書かれている作品はこの二つの国における作品とは限らない。映像資料も無視できないテキストであろう。われわれが生きる現在に通じるテーマが、文学ではどのように探求されてきたのか、テーマ別にその流れを概観することは「文学史」の一つの方法として有効であろう。

註

- (1) 2002年、『英語青年』では2号に渡り「英文学の教え方」についての様々な試みが紹介された。また富山太佳夫は『文化と精読』において「文学史が崩壊する」(77-94)を始め、英文学史のあり方について従来の時系列的なもの、あるいは従来の「聖典」のあり方とは違うアプローチを試みている。
- (2) 杉山洋子は『オーランドー』巻末、「隠し絵のロマンス：伝記的に」(253-276)にて、この小説全体が「パロディとしての文学あるいは文学史」を表していると指摘している(273)。
- (3) ファウルズの作品の中に、文学史の中で女性と男性の関係がどのように描かれてきたかについての作家の考察を読者は目にすることができる。拙稿「人間／男女関係の『地層』：The French Lieutenant's Womanを読む」参照。
- (4) ウルフは*A Room of One's Own*(1929)で、男性中心的な文壇の中で女性作家がどのような立場におかれているかを明らかにした。1970年代には男性中心的な文壇のあり方、「文学史」や「カノン」とは何かが問われ、女性作家の掘り起こし、女性の「文学史」の成立が試みられた。Ellen Moersの*Literary Women*(1976)やElaine Showalterの*A Literature of Their Own*(1978)はその中の代表的な研究成果である。
- (5) クレグはミランダに対して、自分のイニシャルはFであることからFerdinandであると名乗る(37)。この作品は明らかにWilliam Shakespeareの*The Tempest*を意識している。シェイクスピアは、魔術を操る父Prosperoの下でミランダとファーディナンドは結ばれ、父親の代の不和を一応、和解へと導くように描いたが、20世紀の陸の「孤島」では、ミランダとファーディナンドの間にある「性差」や「階級

差」を埋める方法は示されない。

- (6) Terry Eagletonは、Samuel Richardsonの*Clarissa*(1747-8)の中に「階級間」の闘争を読み取っているが(*The Rape of Clarissa*)、『クラリッサ』やThomas Hardyの*Tess of the D'Urbervilles*などで、階級の交代の物語が、ジェンダー間の差異に関連付けられて描かれる点についてはさらに考察が必要であると考え。
- (7) ベアトリスの名前はフェビアン協会設立者の一人であるBeatrice Potterに由来していると後に読者は知らされる(118)。フェビアン協会と社会主義運動、そしてBeatrice Webbについては青山吉信を参照。
- (8) ドラブルはフィクションの中で描かれる女性像が何らかの形で未来の女性像に影響を与えるであろうと考え『碾臼』に続く作品では意図的にポジティブな女性像を描いた。(Suga 14-15)。
- (9) ホーソーンの*The Scarlet Letter*(1850)では、Hester Prynneは非嫡出子を妊娠したために胸に“Adultery”を示すAの文字がつけられる。
- (10) 順に*The Scarlet Letter*、George Eliotの*Adam Bede*(1859)、E. G. Gaskellの*Ruth*(1853)、そして*Tess of the D'Urbervilles*(19)のヒロイン。Valentine CunninghamはハーディのTessはエリオットのHetty Sorrelを主役として描いたのではないかと指摘している(Introduction to *Adam Bede* xviii)。
- (11) 60年代の女性作家の作品については、女性が自分の経験を語っても「女であることは結局'miserable'なのか」という問いかけがなされた('miserablists' from Hilary Bailey, 'The Miserablists: A New Genre' published in *Bananas* 1978. Quoted Suga 13)。ドラブルは小説が未来に及ぼす影響を意識し、アメリカのフェミニズム運動の様子がイギリスに伝わった1970年代、ドラブルは*Jerusalem the Golden*, *The Realms of Gold*で「女」としての人生に失望しない、ポジティブな女性像を意識的に作ろうと試みている。*The Realms of Gold*のヒロイン、Frances Wingateは、富とキャリアと恋愛を楽しむ女性で、作家自身、彼女に両性具有的な、そして勇ましい名前を与えたと語っている(Suga 16-15)。
- (12) Rosi Braidottiは“Mothers, Monsters, and Machines”で、成長過程、あるいは妊娠、出産という経験を経て変化する女性の肉体が、男性を“normal”として基準化してきた歴史の中で“abnormal”、あるいは“monstrous”なものとして捉えられてきたことを指摘している(Conboy 63-5)。ドラブルの作品では男性の「言葉」を中心とする医療現場と、ロザモンドが語る自らの「妊娠・出産」という経験が対比されている。
- (13) A. S. Byattの*The Possession*(1990)では架空の詩人、Henry Randolph Ashがある女性に宛てた手紙をもとに、20世紀の若い男女が謎解きの冒険を始める。この謎解きの中で若く美しい大学教授Maude Baileyは自分の研究する19世紀の女性詩人Crystabel LaMotteが実は自分の祖先であることに気づく。この作品では世代を超えて、女性の愛や「妊娠・出産」に対する態度がどのように変遷してきたのかについての考察を見ることができる。

参考文献

- Alexander, Michael. *A History of English Literature*. London: Macmillan, 2000.
 青山吉信『忍従より自由へ』東京:評論社, 1978.

- Bernard Bergonzi, *The Situation of the Novel*. London: Macmillan, 1970.
- Byatt, A. S. *The Possession: A Romance*(1990). London: Vintage, 1991.
- Conboy, Katie. Ed. *Writing on the Body: Female Embodiment and Feminist Theory*. New York: Columbia UP, 1997.
- Drabble, Margaret. *The Millstone*. New York: Harcourt Brace, 1965.
- . *A Summer Birdcage*(1963). London: Penguin, 1967.
- . *The Realms of Gold*. London: Penguin, 1975.
- Eagleton, Terry. *Rape of Clarrissa: Writing, Sexuality and Class Struggles in Samuel Richardson*. Oxford: Blackwell, 1989.
- 『英語青年』 Vol.CXLVIII No.8, November 1, 2002.(pp.474-489, 511) No.9, December, 2002. (546-573).
- Fielding, Helen. *Bridget Jones's Diary*. London: Picador, 1996.
- Fowles, John. *The Collector*. New York: Little Brown, 1963.
- . *The French Lieutenant's Woman*. New York: Little Brown, 1969.
- Friedan, Betty. *The Feminine Mystique*(1963). New York: Norton, 1997.
- Gaskell, Elizabeth. *Ruth*(1853). Oxford: Oxford UP, 1985.
- George Eliot. *Adam Bede*(1859). Oxford: Oxford UP, 1996.
- Hardy, Thomas. *Tess of the D'Urbervilles*(1891). Oxford: Oxford UP, 1988.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter*(1850). London: Penguin, 1986.
- Hedges, Peter, Chris Weitz & Paul Weitz *Screenplay: About a Boy*. 解説 井上英俊 他, 名古屋:スクリーンプレイ, 2003.
- Hornby, Nick. *About a Boy*. London: Penguin, 1998.
- Knibiehler, Yvonne and Catherine Fouquet. *Histoire des meres: du Moyen Age a nos jours* (1977). 中嶋公子他訳 『母親の社会史:中世から現代まで』 東京:筑摩書房, 1994.
- 窪田憲子編 『イギリス女性作家の半世紀2:60年代・女が壊す』 東京:勁草書房, 1999.
- Leavis. F. R. *The Great Tradition*(1948). London:Penguin, 1993.
- Letts Billie. *Where the Heart Is*. New York: Warner Books, 1995.
- 松村昌家 『ヴィクトリア朝の文学と絵画』 東京:世界思想社, 1993.
- Mitchell, Juliet, and Ann Oakley, eds. *The Rights and Wrongs of Women*. New York: Penguin, 1976.
- 宮澤邦子編 『イギリス女性作家の半世紀5:90年代・女が拓く』 東京:勁草書房, 2000.
- Moers Ellen. *Literary Women*(1976). London: The Women's Press, 1978.
- Richardson, Samuel. *Clarissa: Or the History of a Young Lady*(1747-8). London: Penguin, 1985.
- Showalter, Elaine. *A Literature of Their Own: from Charlotte Bronte to Doris Lessing*. London: Virago, 1978.
- Suga Yukako. Ed. *Margaret Drabble: The Tradition of Women's Fiction: Lectures in Japan*. Oxford: Oxford UP, 1982.
- 杉村使乃 「人間／男女関係の『地層』 : *The French Lieu tenant's woman*を読む」 『敬和学園大学研究紀要』 第11号 (2002) : 251-264.
- Takano Fumi Ed. *Margaret Drabble in Tokyo*. Tokyo: Kenkyusha, 1991.
- 富山太佳夫 『文化と精読: 新しい文学入門』 名古屋:名古屋大学出版会, 2003.
- Woolf, Virginia. *Orlando*(1928). London: Penguin. 1993.
- . 『オーランド-』 杉山洋子 訳・解説, 東京:国書刊行会, 1983.

Woolf, Virginia. *A Room of One's Own*(1929). London: Collins, 1977.